

ふるさとのお話

愛鷹山の天狗



昔、愛鷹山には、いろいろな天狗が住んでいたということです。この天狗について、数々の昔話が言い伝えられています。今回は、この天狗の話を紹介します。

「おんにも、くりょう」

昔、愛鷹山には、たくさんの猪がいて冬になると里まで来て、農作物を食い荒していました。

こんな時、村人達は大勢で山深く猪を捕りにいきました。あるとき、大勢で猪を追っているうち遅くなったので山小屋で昼間捕った猪を料理し、酒盛りをはじめました。

火に鍋をかけていると、急に炉の火が吹き出し、鍋の肉がクタクタ音をたてて煮えはじめました。みんなが不思議がっていると、小屋の戸が開き、ぬうっと大きな毛むくじらの手が出ました。

みんな、びっくりして小屋のすみで震えていると「おんにも、くりょう」と人の声ともつかない声でいうのです。猪の肉をくれといっているのですが、恐ろしいのでだれもくれません。そのうち、元気のいい若者が鍋の中で煮えたぎっている猪の肉を大きな手にのせました。

すると、まったく大きな声で、「熱い」と声をだしてとんでいってしまいました。この大きな声が、山中にこだまし、しばらく静まりませんでした。やがて、元の静かな山にもどると人々は「今のは天狗だな」と話あいました。熱い肉を手を持った天狗は、これにこりて二度と山小屋付近にでなくなったということです。

地名の由来

鈴川



鈴川付近は奈良時代から「よしわら」と呼ばれていました。吉原宿が寛永16年に依田橋村の西に移ってから鈴川村といいました。鈴川という名は付近を流れる沼川が滝川や和田川と合流し、清らかな流れだったので五十鈴川にあやかりつけたのかも知れません。

鈴川地区は鎌倉時代から室町末まで「見付」とも呼ばれていました。

古墳のはなし①

古墳と祖先の生活



浅間古墳

「古墳」てなあ～に

狩りを中心に生活した縄文時代、作物を作り共同生活を始めた弥生時代、そして身分や階級ができて、社会が動くようになった古墳時代。

古墳は、この古墳時代(4～7世紀(1600～1300年前))に、土や石を高く積みあげて造られたお墓のことです。身分の高い人は死んだあとも、古墳の姿からおそれ敬われたいため、あるいは古墳を死んだあと生活する場所と考えたからです。

増川の「浅間古墳」や比奈の「東坂古墳」は「スルガの国」の国王か、その一族のお墓だと考えられています。古墳時代の終わり頃には部落の村長までが古墳を造り、葬られるようになりました。しかし、富士市内の古墳には葬られた人の名前が知られた例はありません。

こちら編集室

9年ぶりに降った雪の中、取材班も雪景色を撮ろうと、市内の各地へ。岩本山では、子どものソリ遊びの瞬間をとらえようと思わずスッテン、でも日頃取材で鍛えた体は、骨折などしませんでした。